

アッタカターの源泉資料（上）

—研究序説—

森 祖 道

目 次

1. はじめに
2. パーリ三蔵
3. 蔵外の三書
4. 他のパーリ・アッタカター（以上本号）
5. 所謂シーハラ・アッタカター
6. 破折の対象
7. その他
8. おわりに

略 号（本稿使用のパーリ原典は、特記のない限り、凡てPTS版である）

A = Aṅguttaranikāya

AA = Aṅguttaraṭṭhakathā

Ap = Apadāna

Apadānaṭṭhakathā

Bv = Buddhavaṃsa

BvA = Buddhavaṃsaṭṭhakathā

CNd = Culla-Niddesa

CNdA = Culla-Niddesaṭṭhakathā

Cp = Cariyāpiṭaka

CpA = Cariyāpiṭakaṭṭhakathā

D = Dīghanikāya

DA = Dīghaṭṭhakathā

Dhk = Dhātukathā

DhkA = Dhātukathā-ṭṭhakathā

Dhp = Dhammapada

DhpA = Dhammapadaṭṭhakathā

Dhs = Dhammasaṅgaṇi

DhsA = Dhammasaṅgaṇi-aṭṭhakathā
 Dv = Dīpavaṃsa
 It = Itivuttaka
 ItA = Itivuttakaṭṭhakathā
 J = Jātaka
 JA = Jātakaṭṭhakathā
 Kaṅkh = Kaṅkhāvitarāṇi
 Khp = Khuddakapāṭha
 KhpA = Khuddakapāṭhaṭṭhakathā
 Kv = Kathāvatthu
 KvA = Kathāvatthu-aṭṭhakathā
 M = Majjhimanikāya
 MA = Majjhimaṭṭhakathā
 Mil = Milindapaṇha
 MNd = Mahā-Niddesa
 MNdA = Mahā-Niddesaṭṭhakathā
 Mv = Mahāvamsa
 Nd = Niddesa
 NdA = Niddesaṭṭhakathā
 Nt = Nettipakarāṇa
 NtA = Netti-aṭṭhakathā
 P = Paṭṭhāna
 PA = Paṭṭhānaṭṭhakathā
 PañcpA = Pañcapakarāṇaṭṭhakathā
 Pd = Paramatthadīpanī
 Pj = Paramatthajotikā
 Pṭs = Paṭisambhidāmagga
 PṭsA = Paṭisambhidāmaggaṭṭhakathā
 Pug = Puggalapaññatti
 PugA = Puggalapaññatti-aṭṭhakathā
 PV = Petavatthu
 PvA = Petavatthu-aṭṭhakathā
 S = Saṃyuttanikāya

SA=Saṃyuttaṭṭhakathā
 Smp=Samantapāsādikā (=VA)
 Sn=Suttanipāta
 SnA=Suttanipātaṭṭhakathā
 Thag=Theragāthā
 ThagA=Theragāthā-aṭṭhakathā
 Thig=Therīgāthā
 ThigA=Therīgāthā-aṭṭhakathā
 Ud=Udāna
 UdA=Udānaṭṭhakathā
 V=Vinayapiṭaka
 VA=Samantapāsādikā (=Smp)
 Vibh=Vibhaṅga
 VibhA=Vibhaṅgaṭṭhakathā
 Vim=Vimuttimagga
 Vis=Visuddhimagga
 VisT=Paramatthamañjūsā
 Vv=Vimānavatthu
 VvA=Vimānavatthu-aṭṭhakathā
 Y=Yamaka
 YA=Yamakaṭṭhakathā

1. はじめに

パーリ・アッタカター文献¹⁾は、一般には、スリランカーの古代の首都、アヌラーダプラに所在した Mahāvihāra (大寺) に秘蔵伝持されていた Mahā Aṭṭhakathā を始めとする所謂シーハラ・アッタカターを源泉資料として、これらをパーリ語に翻訳しつつ再構成したものとされている。確かに、このシーハラ・アッタカターが存在しなかったならば、今日のパーリ・アッタカターは制作されなかったであろうから、その意味では、このシーハラ・アッタカターこそは、パーリ・アッタカターの中心的根本資料であると言っても過言ではない。しかし乍ら、実際にパーリ・アッタカター文献を渉猟すると、これらのシーハラ・アッタカター以外にも、数多くの文献資料が引用あるいは借用されていることに容易に気が付くのである。これらの引用(乃至は借用)文献は、インド本土を始めとするスリランカー以外の国の人々に対して、スリランカー上座部

Mahāvihāra 派の「正統的教説」を顕揚するための論拠として、主として使用されているのである。がしかしそれと同時に、その中には彼等の「正統説」に背馳する邪説あるいは異端の説として、彼等の「破折の対象」として挙げられているものも存する。いづれにしても、これら多種多様な引用・借用文献の組合わせによって、現在のパーリ・アッタカターは構成されているわけであるから、これらの源泉資料の種類・引用状態等の様相をアッタカター全体に涉って先づ概観し整理してみる必要があると考える。

以上の様な観点より、筆者はアッタカターの源泉資料の全体的考察を行なったが、その結果は次の六種類に大別して纏めることが妥当である。即ち、

- | | |
|-----------------|------------------|
| 1. パーリ三蔵 | 4. 所謂シーハラ・アッタカター |
| 2. 蔵外の三書 | 5. 破折の対象 |
| 3. 他のパーリ・アッタカター | 6. その他 |

である。よって次節以下においては、これら6種に大別されたパーリ・アッタカターの源泉資料の各々について、順次、その内容や種類、出典等に関して吟味検討をする。そしてこの様な吟味検討を通して、アッタカター文献の成立や文献的特性等について様々な事実が解明されるものとするのである。

2. パーリ三蔵

言う迄もなく、パーリ三蔵はパーリ・アッタカターの註釈の対象であるから、当然、アッタカター全体の中に、三蔵全体が被註釈書として包含されているという関係にあるわけである。しかしこの様な被註釈書としての三蔵とは別に、アッタカターの註釈や解説の中には、三蔵の經典や論書等が「正統説」の検証として数多く引用されている。例えばブッダゴースの主著 *Visuddhimagga* の場合を例に採ると、本書に引用あるいは挙名されている三蔵中の經典で、その經典名がそこに明記されているケースだけを挙げても、以下の如く多数に上る。

凡 例

- 1) 各行冒頭の經典名に続く（ ）内の数字は、Vis の頁を示す。
- 2) 等号の次の数字は被引用經典の当該頁を示す。ローマ数字は巻数を意味する。
- 3) 各行冒頭の○印は Vis において引用文が記されている場合を意味する。
- 4) 各行末尾の（ ）内の經典名は、被引用經典の現在の実名を表わす。
- 5) 各分類ごとに、經典は原則として Vis における引用挙名順に配列した。

(I) VINAYA PĪṬAKA

○Khandhaka (101)=V VII-231, cf. 223

(II) SUTTA PĪṬAKA

(A) *Dīgha Nikāya*

- Brahmajāla (30)=D I-9, cf. I-8
- Pasādaniyasuttanta²³(133) cf. D III-90ff. (Smpasādaniyasuttanta)
- Ambaṭṭhasutta (202)=I-100
- Mahāsatipaṭṭhāna (243)=II-290ff.
- " (247f.)=II-294
- Āṭānāṭiyaparitta (414)=III-194ff. (Āṭānāṭiyasuttanta)
- Aggaññasutta (417)=III-80f.
- " (419)=III-90
- Poṭṭhapādasuttanta (671)=I-185
- Dasuttarasuttanta (671)=III-288

(B) *Majjhima Nikāya*

- Dhammadāyādasutta (44)=MI-12ff.
- Mūlapaṇṇāsa (95)=Suttas 1~50
- Majjhimapāṇṇāsaka (95)=Suttas 51~100
- Uparipaṇṇāsaka (95)=Suttas 101~152
- Rāhulasutta (115)=I-424 (Mahārāhulovādasutta)
- Bhayabheravasutta (202)=I-22f.
- Majjhimapāṇṇāsaka (202f.)=I-355 (Sekhasutta 中)
- Mahāhatthipadopama (243, 347)=I-184ff.
- Dhātuvibhaṅga (243, 347, 349)=III-237ff.
- Mahārāhulovāda (243)=I-420ff.
- Rāhulovāda (347, 349)=I-420 (Mahārāhulovādasutta)
- Mahāhattipadūpama (248f.)=I-185

Anaṅgasutta (393f., 377) = I -24ff.

Vatthasutta (377) = I -36 (Vatthūpamasutta)

○Brahmanimantaṇṇikasutta (393f.) = I -330

○Bhaddekarattasutta (432) = III-197 (Mahākaccānabhaddekarasutta)

Bālapaṇḍitasutta (499) = III-163ff.

Nandakovādasutta(667) = III-270ff.

○Alagaddasuttanta (671) = I -139

Rathavinītasuttanta (671) = I -147

○Saḷāyatanavibhaṅgasutta (671) = III-220

(C) *Samyutta Nikāya*

○Haliddavasenasutta (324) = S V-119f. (Metta)

○Mahakasutta (393f.) = IV-290

Dhajaggaparitta (414) = I -218ff.

Khandhaparitta (414) = II -249, etc. (Khandha)

Bhārasutta (479) = III-25ff.

(D) *Aṅguttara Nikāya*

Aggappasādasutta (207) = A II-34

○Gedhasutta (226) = II -312 (Anusati)

○Uposathasutta (227) = I -206f. (左の経名なし)

○Ekādasanipāta (227) = V -333

○Sambādhokāsasutta (227) = III-314 (左の経名なし)

○Apaṇṇakasutta (392) = I -113 (左の経名なし)³⁾

○Kaccānasutta (519) = II -17 (Kaccāyanagotta), III-135

○Susimasuttanta (671) = II -124 (経名なし)

(E) *Khuddaka Nikāya*

Khuddakapāṭha

- Mettasutta (297)=khp 8 (or Sn p. 25)
- Ratanasutta (414)=3ff. (or Sn p. 39ff.)

Udāna

- Meghiyasutta (114f.)=Ud 37
- Udāna (380)=39ff.

Suttanipāta

- Mettasutta (297)=Sn 25 (or Khp p. 8)
- Ratanasutta (414)=39ff. (or Khp p. 3ff.)

Jātaka

- Cūḷadhammapālajātaka (302)=J. III-181
- Khantivādijātaka (302)=III-39ff.
- Silavajātaka (302)=I-261ff. (Mahāsīlavajātaka, cf. 1-319ff. Silavanāgajātaka)
- Mātuposakajātaka (305)=IV-90ff.

Niddesa

- Mahā-Niddesa (24ff.)=MNd 224ff.
- Niddesa (140)=MNd 1
- Niddesanaya (209)=MNd 457 (Pṭs I-174)
- Niddesa (210)=MNd 142

Paṭisambhidāmagga

- Paṭisambhidā (6f.)=Pṭs I-44
- " (11)=I-42
- " (12f.)=I-43
- " (14)=I-44

- Paṭisambhidā (49f.)= I -46f.
- " (209)= I -174 (or MNd 457)
- " (271, 2回)= I -176 (共に)
- " (276f.)= I -184ff.
- " (280f.)= I -170ff.
- " (288)= I -187
- " (296f.)= II -130f.
- " (309, 2回)= II -130
- " (311)
- " (382f.)= II -202f.
- " (386)= II -206
- " (387)= II -207
- " (390)= II -207
- Pāli (294f.)=Pṭs II -394
- Paṭisambhidā (398)= II -208f.
- Paṭisambhidāmagga (658)= II -67f.
- " (671)= II -64

(III) ABHIDHAMMA PIṬAKA

(A) *Dhammasaṅgaṇi*

Abhidhamma (324)=Dhs 53ff.

- Abhidhamma (658)=70f.

(B) *Vibhaṅga*

- Vibhaṅga (89)=Vibh 343
- " (140)=256
- " (141)=256
- " (145, 2回)=257 (2回)
- " (145f.)=252
- " (156)=258

○Vibhaṅga (157, 2回)=258 (2回)

○ " (158)=258

○ " (164)=260

Indriya-Vibhaṅga (165)=122ff.

○Vibhaṅga (167)=261

○ " (296)=272

○ " (314)=273

○ " (316)=274

○ " (329)=261

○ " (330)=261f.

○ " (331)=262

○ " (334)=262

○ " (336)=263

○Abhidhamma (441)=293f.

○ " (472)=1, 3, 5, 7, 9

○Vibhaṅga (474)=3

" (476)=4

○ " (562)=144, etc.

○ " (566)=136

" (567)=380

(C) *Kathāvatthu*

Kathāvatthu (692)=Kv 212f.

(D) *Paṭṭhāna*

○Paṭṭhāna (433)=TikaP 154

" (562)=TikaP 5

○ " (671)=TikaP 159

○ " (701)=TikaP 159

以上、Vis における 122 の挙例は、あくまでも経典名が明記されている場合のみの表示である

が、実際には典拠が明記されていない引用文であってその出典が一応確認されている例は、上記の場合の5倍以上、およそ620~630例(増補して計算)の多きに達する。その具体的な大要はPTS版 Vis の巻末 (pp. 753~760) に収められている “Quotations in the Visuddhimagga from Canonical Books and the Milindapañha” によって、われわれはおおよそ把握することが可能である⁹⁾。そしてその中には、筆者の示した上記の「表示」にはその名が挙げられていない若干の経典、即ち *Dhammapada*, *Itivuttaka*, *Vimānavatthu*, *Theragāthā*, *Therīgathā*, *Apadāna*, *Dhātukathā*, *Puggalapaññatti* 等よりの無記名の引用文も相当数含まれているのである。また *Vinaya Piṭaka* よりの出典明記の引用はわずかに1例に過ぎないが、無記名のそれは17例の多きを数え、同様に、*Dhammasaṅgaṇi* よりの出典明記の引用例(それもただ *Abhidhamma* とあるに過ぎない)はわずかに2例であるが、無記名のそれは30例に達している。この様に出典明記の引用乃至は挙名の例に、出典無明記の例を加えると、三蔵よりの引用例は相当多数に上り、その範囲は三蔵全体に漏れなく及んでいることが明らかとなる。以上は、あくまでも Vis における三蔵よりの引用状況の例に過ぎないが、他のアッタカター各書においてもその事情は大同小異である。つまりアッタカター全体に関して、多かれ少なかれ Vis の場合と同様の文献的事実が存すると考えてさしつかえなからう。但し、Vis の場合は三蔵よりの引用が最も多い例の一つであると考えられる。冒頭にも述べた如く、アッタカターとは三蔵の註釈書なのであるから、アッタカター全体にわたって三蔵の各書が縦横に引用参照されていて、けだし当然のことであろう。

3. 蔵外の三書

ここで言う蔵外の三書とは、言う迄もなく、今日のパーリ三蔵(聖典)の外に置かれ、後世のアッタカター(註釈書)と三蔵の中間に位置づけられている三種のパーリ語文献、即ち *Milindapañha*, *Nettipakarana*, *Petākopadesa* のことである⁹⁾。そしてこれら三書は、元来はパーリ仏教に属するものではなく異系統の文献であったのが、後にパーリ仏教に採用収納されたものと考えられている⁹⁾。これらの内、Milは成立年代を異にする2,3の新古の層から成っていて、その主体的成立は B. C. 1C. 頃ではないかと思われる。また *Netti* と *Petaka* は共に Kaccāyana の作とされ、内容的にも同系統に属する「姉妹書」であり、その成立はおおよそ A. D. 1C. 前後の頃と思われる⁹⁾。

さて、上記の三書がアッタカターの各書に如何に引用されているかについて以下に表示しよう。

凡 例

- 1) ○印は引用文が存する場合を意味する。

2) 等号の左辺の数字は、それぞれ左端に記されたアッタカターの頁（特にローマ数字は巻数）を示し、右辺の数字は当該三書それぞれの頁を示す。

3) *, **……等の星印はそれぞれの引用文が相互に原則的に一致することを示す。

(I) Milindapañha

	書 名 明 記	書 名 無 明 記
Vis		○ 45=367 ○270=369 ⁸⁾ ○283=62 438=87*
V A	742	
D A		○ I -275f. =168f. II -592=143 ○ III-810=45 ⁹⁾ ○ III-900ff. =236ff. **
MA		○ II -344=87* ○ II -387=410 ○ III-211=167 ○ III-369f. =168f. ○ IV-52=15 ○ IV-118ff. =236ff. **
S A	○ II -99f. =102***	○ II -294=87*
A A		○ I -59=102*** ○ II -11ff. =236ff. **
DhpA		○ I -127=67f. (少異) ○ IV-173=387 (少異)
MNdA		○ I -18=141 (少異) ○ I -124=33**** ○ I -156=30 ○ I -166=60
DhsA		○ 66=65 ○108=60 ○112=62 ○114=62, 63 (少異) ○118=38 ○119f. =35 ○120=35 (少異) ○120f. =36

		○121=37 ○122=38, 39 ○142=87* ¹⁰⁾
VibhA		○331=33**** ○408=300f. ○434ff. =236ff. **

(II) Nettipakarāṇa

	書名明記	書名無明記
MA	○ I -31=3 (少異)	
ThagA	cf. III-21=NettiA 203	○ I -121=131 (少異) ¹¹⁾
ApA	491	

(III) Peṭakopadesa

	書名明記	書名無明記
Vis	○141*	
VA	○ I -143*	
MNdA	○ I -127* ○ II -318	
PṭṣA	○ I -181*	
DhsA	○165*	

以上の「表示」によって、これら蔵外の三書の内では、Mil からの引用が最も多く、それも三蔵の註釈全体に広く散在していることは明らかであるが、しかし書名明記の場合はわずかに2例である。無書名の引用であっても Mil よりの引用文には、Milindarāja あるいは Nāgasenatthera という、この対論の主客両者の名前の方あるいは両方がしばしば現れるし、またそうでなくても、“Mahārāja” (大王よ) という本書独特の呼びかけの言葉が出て来たりするので、それが本書よりの引用であろうという予想は比較的立てやすい。

これに対して残りの二書からの引用は非常に少く、この点からもこれらの二書が、既に指摘されている様に、“三蔵——アッタカター”と発展して行ったパーリ文献史の主流を離れた異系統の傍系書であったことがうかがえるのである。但し、歴大な分量のアッタカターのことであるか

ら、今後更に精密な渉猟を続ければ、これら両書よりの引用、特に書名無明記の引用例は若干は新たに発見されるかも知れない。次に、上表の Nt の参考引用例である ThagA (III-21)の文は、

Indriāni ca gopayanti, tass'eva pariyāyavacanāṃ. Pariyāa-vacane ca payojanāṃ Nettī-aṭṭhakathāya vutta-nayen'eva veditabbam.

とあり、ここに挙げられている書名は *Netti-aṭṭhakathā* であって、*Nettipakaraṇa* ではない。もし本書が本当に Dhammapāla 作の NtA を指すものとすれば、同じ Dhammapāla 作の ThagA に、同人の NtA が引用されていることになり、この点より判断すれば、Dhammapāla は ThagA、更には恐らく Pd 凡てを制作する以前に NtA を著わしたことになる。但し、もし NtA 中に Pd よりの引用が存するとすれば、彼は NtA と Pd とを並行的に著わしたことになる。しかしこの点の確認は今後の課題である。なお上表で示した Nt の当該頁 p. 203 には、“pariyāya-sadda” という語は存するが、上記の文に見られた“pasiyāya-vacana” という表現は見られない。

最後に *Peṭakopadesa* についてである。上表によって明らかな様に、全アッタカター中で本書を引用している箇所は 6 ケ所であるが、その内の 5 ケ所 (*印) は同一文である (前後数頁にわたって相互に同文)。従って内容的には 2 種類の引用が存することになるが、この 2 種類共にその出典は、正確に表現すると、“Peṭaka” (蔵論) であって、“Peṭakopadesa” (蔵論釈) とはなっていない。しかも上記の 2 種類の引用文は、いずれも今日の *Peṭakopadesa* 中にはその同一文を見出し得ない¹²⁾。そこでこれに関して、ババット博士は漢訳『解脱道論』中の *Peṭaka* よりの引用文 (これは「三蔵」として引用されている) を検討するなどして、*Peṭaka* と *Peṭakopadesa* とは別の書であるという見解を持った¹³⁾。一方これに対して、水野博士は、更に広く龍樹の『大智度論』や所属部派不明の漢訳『四諦論』中に引かれている本書の該当文を精査して、*Peṭaka* には現存のパーリ文献のみでなく、古来、広略種々の同類書が行なわれていたに相違なく、現存のパーリ文は極めて不完全に伝えられたその一種であること、更には Kaccāyana 作とされる最初のを *Peṭaka* と言い、これを註釈改変したものを *Peṭakopadesa* と別称した場合もあったろうが、しかし後者を単に “Peṭaka” と略称した場合もまたあり得たから、実際にはこの両書は共に一類の論書に対して命名されたと見らるべきであると述べている¹⁴⁾。因みに同様の一例として、Dhammapāla の NtA 中に引用されている *Peṭaka* の文章というものも、現在のパーリ文の中にそれと一致する文を見出し得る場合と、見出し得ない場合とが存することが指摘されているのである¹⁵⁾。

4. 他のパーリ・アッタカター

次には、他のパーリ・アッタカターからの引用状況、つまりパーリ・アッタカター相互の引用状況についてであるが、これは多数のアッタカターが相互に、しばしば他を引用しているので、

その様態は極めて複雑多様であると言えよう。そこで先づ他の書名を明記して引用している場合のみ（従って書名無明記の場合及び当該文献自身の引用例は除外。また、書名のみで実際に引用文がない場合も含む。）を集録し、各アッタカターにおけるその典拠を凡て表示してみる。但しその「表示」作成の前提として留意しなければならない事項が二項ある。その第一は、各書に挙名されているアッタカターが現在のパーリ・アッタカターなのか、あるいは次節で論ずるいわゆるシーハラ・アッタカターの同名の文献であるのかの判別の問題である。そこでその判別の基準を考えると、言う迄もなく、パーリアッタカターは Dhpa と JA とを例外として、被註釈書（三蔵）の名を冠した名称（*Dīghatthakathā*, *Udānatthakathā* 等、以下これをA名とする）並びにそうでない各書独自の書名（*Sumaṅgalavilāsini*, *Paramatthadīpani* 等、以下これをB名とする）が存する。但し Dhpa と JA とにはB名はない。一方、シーハラ・アッタカターの中にも、*Vinayaṭṭhakathā*, *Dīghatthakathā*, *Majjhimaṭṭhakathā*, *Samyuttaṭṭhakathā*, *Aṅguttaraṭṭhakathā* 等という名称の古資料が含まれている。従ってこれらのシーハラ・アッタカターとA名のみで表現されたパーリ・アッタカターとの判別が容易に付けられないケースが出て来る。また、B名を持たない上記の Dhpa と JA の場合にも同様の問題が生ずる。さて、各アッタカターにおける実際の挙名の例は、(1)A名とB名とを併せて記している場合、(2)A名のみを記している場合、(3)B名のみを記している場合とが存する。この場合(1)及び(3)のケースは、それがパーリ・アッタカターであることは明白であって問題はなく、また(2)の場合であっても、同一書中の別の箇所、乃至は同一著者の別書中に(1)あるいは(3)で表記された該当書が存すれば、それもパーリ・アッタカターと判定して差しつかえない。何故ならば、アッタカターの著者達が同一の註釈書のパーリ語本と古いシーハラ語本との両者を併用的に参考しつつ、両者を引用し分けていたとは考え難いからである。但しそれは、パーリ語本が既に制作されていたと考えられる場合についての判断基準であって、凡てのパーリ・アッタカター中、最初に著わされたとされる Vis の場合等は別である。いづれにしてもこの様な判断は個々の場合について総合的に検討して下す必要がある。

次に第二の事項として、アッタカターの著者の真偽問題がある。これは大変難解な課題であって、特に *Buddhaghosa* の著作に関しては異説が多く、多くの学者の努力にもかかわらず未だ真の解決をみていない¹⁶⁾。しかし今、この問題を深く検討する余裕は勿論ないので、伝統的に *Buddhaghosa* の作とされているアッタカターを次の2種に分類する。即ち(1)従来誰れからも疑義が出されず、諸学者によってその真作性が一応容認されている著作、(2)多かれ少なかれその真作性が疑問視されている著作、とに分ける。そして上記の著作を含め、全アッタカターをその著者によって分類して示すと以下の如くである。

(1) *Buddhaghosa* 作: Vis, Smp, Kankh, DA, MA, SA, AA

(2) *Buddhaghosa* 作が疑問視されているもの: Pj (Khp, SnA), Dhpa, JA, DhsA, VibhA,

PañcpA (DhkA, PugA, KvA, YA, PA)

- (3) Dhammapāla 作: Pd (UdA, ItA, VvA, PvA, ThagA, ThīgA, CpA)
- (4) Upasena 作: NdA
- (5) Mahānāma 作: PṭsA
- (6) 著者不明: ApA
- (7) Buddhadatta 作: BvA

以上2点の相関関係に留意して、パーリ・アッタカターと同名のシーハラ・アッタカターとの判別をしながら、パーリ・アッタカター相互の引用状況を表示すると次の通りである。

凡 例

- 1) ゴチック体で表わした具名は、他のアッタカターを引用している文献の名である。
- 2) 各具名の下に列記されている略号の文献はそれぞれに「引用されているアッタカター」を示す。その次の数字は「引用している文献」の頁を表わす。ローマ数字はその巻数を表わす。
- 3) 文献名の “aṭṭhakathā” と “vaṇṇanā” の表現の相違は、これを無視し同等に扱う。
- 4) 頁数字の前に付した◎印は、A名、B名(上記本文参照)併記の場合を意味し、○印はB名のみの場合、無印はA名のみの場合である。但し、元来特定の「聖典」の註釈書ではなく、従って一種類の書名を有するだけの Vis の場合は、この様な識別符号を付さない。
- 4) 頁数字の後に付した(?)は、そこに挙げられている文献がパーリ・アッタカターなのか、シーハラ・アッタカターなのか判然としない場合を意味する。

(I) Samantapāsādikā

Vis : I -147, 159, 160, 161, 162; II -394, 417, 418, 430; IV-788; V-953

DA : I -◎172

MA : I -◎172, ◎173; IV-◎870; V-◎965

DhsA : I -◎150¹⁷⁾; V-◎1025

VibhA : V-◎953¹⁸⁾

(II) Kaṅkhāvitarāṇi

Smp : ◎50, ○51, ○51, ○51, ○54, ○58, ○62, ○74, ○84, ○107, ○110, ○113, ○155, ○159, ○168.

(III) Dighaṭṭhakathā

Vis : I - 2 (2回), 34, 92, 105, 110, 120, 121, 125, 170, 173, 181, 183, 201, 209, 210, 212, 219, 220, 220, 227; II -374, 391, 404, 405, 412, 460, 462, 511, 513, 562, 563, 564, 632, 644, 646; III-764,

769, 771, 783(2 回), 785, 804, 840, 885, 891, 978, 1037. cf. 1044

Smp : I -○84, ◎133; II -◎363, ◎530, ○567, ◎592, ○593; III -◎981, ○1000, ○1043

VibhA : II -642¹⁹⁾

(IV) Majjhimaṭṭhakathā

Vis : I -2, 10, 52, 77, 124, 125, 126, 154, 155(2 回), 157, 164, 172, 176, 186, 215, 221(2 回), 222
(2 回), 248, 268, 270, 272, 275, 287(3 回), 289, 300; II -12, 30, 67, 69, 114, 155, 200, 214, 215
(2 回), 217, 219, 223(2 回), 225, 227, 228(2 回), 308, 309, 313, 326, 328, 352, 359, 366, 423;
III -133, 141(2 回), 191, 255, 256, 259, 260(2 回), 261, 264, 343, 392; IV -90, 99, 104, 134, 139,
141(2 回); V -21, 26, 65, 109

Smp : I -◎198, ○199; III -◎45, ◎106; IV -○46

DA : I -◎2; III -◎386; V -◎24

Vibh : II -◎30

(cf. *Satipaṭṭhānavāṇṇanā* <M No. 10 or S No. 43-5> : II -88, 313²⁰⁾)

(V) Saṃyuttaṭṭhakathā

Vis : I -2(2 回), 12, 43, 341; II -6, 10, 11, 16, 17, 47, 74, 94, 106(2 回), 126, 164, 175, 278, 288,
355, 356, 368; III -12, 16(2 回), 71, 72, 96, 105, 117, 127, 171, 175, 176(2 回), 197, 230, 250,
263, 266, 271, 277, 297

Smp : II -◎37, ◎145, ○145

DA : I -○3, ◎136, ◎348; II -296²¹⁾; III -181²²⁾

MA : I -○13; II -◎45, 296²³⁾; III -181²⁴⁾

VibhA : II -45²⁵⁾

(VI) Aṅguttaraṭṭhakathā

Vis : I -2, 14, 97, 112; II -50, 74, 75, 76, 77(3 回), 96, 100, 134, 185, 244, 262, 267, 269, 281, 283,
287, 306, 323, 324, 336, 364, 380; III -20, 51, 55, 72, 94, 135, 198, 200, 201, 204, 335, 355, 358,
390, 396, 409, 411; IV -5, 88, 119, 145, 146, 147; V -16, 20, 48, 83, 99

Smp : III -◎334; IV -◎136, ○137

DA : I -◎3; II -◎285

MA : I -◎15; III -409; V -50

VibhA : V -◎16

(VI) Khuddakapāṭṭhakathā (Pj I)

Vis : 185²⁶⁾

Smp : 97 (? 2回)²⁷⁾

(VIII) Suttanipāṭṭhakathā (Pj II)

Vis : 246, 248(2回), 249, 444

Smp : 340 (? 但し Khandhakatṭhakathā とある)

MA : ◎300

JA : 2(?)

DhsA : ◎120, ◎128²⁸⁾

(IX) Jātakatṭhakathā

MA : V-456 (?)²⁹⁾

SA : V-38(?)

AA : I -131(?)

(X) Udānatṭhakathā (Pd I)

Vis : 24, 85, 196, 236, 268, 283

Smp : 50(?)³⁰⁾, 101(?)³⁰⁾

MA : 101(?)

DA : ◎5³¹⁾

JA : 124(?)

VibhA : ○33, ◎43

(XI) Itivuttakatṭhakathā (Pd II)

Vis : I -6, 12, 168; II -85, 88, 176

AA : II -105(?), 187(?)³²⁾

(XII) Vimānavatthu-aṭṭhakathā (Pd III)

DhpA : 165(?)³³⁾

(XIII) Petavatthu-aṭṭhakathā (Pd IV)

VvA : ◎71, ◎92, ◎244, ◎257

(XIV) Theragāthā-aṭṭhakathā (PdV)

Vis : II-206; III-54, 198

SA : III-○190

AA : II-68(?), 148(?), 155(?)³⁴⁾

SnA : II-114(?)³⁵⁾

DhpA : II-119(?), 148(?), 211(?)

UdA : I-◎36; II-155³⁶⁾

ItA : I-◎36, ◎167, ◎194; III-17

(XV) Cariyāpiṭakaṭṭhakathā (Pd VII)

Vis : 313, 315, 317

JA : 3(?), 16(?)³⁷⁾, 166(?), 203(?), 247(?), 266(?)

DhsA : ◎16

(XVI) Niddesaṭṭhakathā (I=MNdA, II=CNdA)³⁸⁾

Vis : I-98(2回), 405; II-111

Smp : I-◎115, ○116, 398

(XVII) Paṭisambhidāmaggaṭṭhakathā

Vis : 104, 275, 290, 494, 501, 532, 590, 592, 594, 607, 657, 665

Smp : 508(?)³⁹⁾

SA : 346(?), 596(?)⁴⁰⁾

DhsA : 574(?)

VibhA : 508(?)⁴¹⁾

(XVIII) Apadānaṭṭhakathā

AA : 493(?)⁴²⁾

Pj : 152(?)⁴³⁾, 153(?)⁴⁴⁾

DhpA : 118(?), 124f. (?), 493(?)⁴⁵⁾

ThagA : 493(?), 540(?)

DhsA : ◎194, ◎201⁴⁶⁾

(XIX) BuddhavaṃsaṭṭhakathāVvA : ◎284⁴⁷⁾

DhsA : ◎126

(XX) Dhammasaṅgani-aṭṭhakathā

Vis : 168(2回), 183, 186, 187(2回), 189, 190, 192, 195, 196(2回), 198

Smp : ◎97, ○98

VibhA : 368(?), 407(?)

(XXI) Vibhaṅgaṭṭhakathā

Vis : 56, 224, 264, 331, 362, 367, 380

Smp : 334(?)

DhsA : 43(?), 105, (?), 396(?), 410(?), 465(?), 518(?)⁴⁸⁾**(XX) Puggalapaññatti-aṭṭhakathā**

Vis : 234, 243, 254

AA : 205(?), 222(?), 247(?)

DhsA : 198(?)⁴⁹⁾

次に、上記の各アッタカターにおける引用状況を更に整理して、それぞれの引用回数のみを一覧表にして示すと次頁の通りである。表の左端に縦に記した方は引用をしているアッタカターを意味し、上端に横に記した方は引用されているものを意味する。例えば、SmpにはVisは11回引用されていることを示している。なお()内の数字は、パーリ・アッタカターなのか古いシーハラ・アッタカターなのかが判然としない場合(上表では頁数字に(?)が付されている)の回数を表わす。

この一覧表を検討することによって、パーリ・アッタカターの成立の前後関係や相互関連等について、例えば次の様な諸点が明らかとなる。

(1) BuddhaghosaのVisには他の如何なるアッタカターからの引用も存在せず、逆に他のほとんどのアッタカターはVisを引用している点より判断して、Visは伝統的に述べられて来た通り、Buddhaghosaの著作中のみならず、恐らく凡てのアッタカター文献の中で最初に著わされたものであり、かつ多くの註釈家達に重要視されていたことは明らかである。

(2) VisよりSmp, Kaṅkh, DA, MA, SA, AAに到るBuddhaghosaの著作中、同じVinayaの註釈であっても、SmpにはKaṅkhよりの引用はないが、KaṅkhにはSmpより

引用が数多く見られるので、前者が先に著わされ後者はその後に著わされたことが知られる。

(3) また DA, MA, SA, AA の四ニカーヤの註釈については、上記の順に著わされたと考えられる。何故ならば上記の四書中、順次前書には後書の引用がなく、後書には前書の引用が見られるからである。

(4) 更に、Smp と四ニカーヤの註釈との間の成立前後関係としては、四ニカーヤ註凡てに Smp よりの引用が見られ、なおかつ Smp にも DA と MA の名が記述されているわけであるから、この両者は（少くとも Smp と「DA 及び MA」とは）併行的に著わされたものか、一応著述された後、いずれかに後世の加筆が若干行われたものとしか考え様がないことになろう。

(5) Buddhaghosa の真作性が疑われているアッタカターの内、Pj, DhpA, JA, PañcpA の四書と Vis より AA に到る諸書との間には、Vis を除いてはほとんど関係がなく、この点より見ても上記四書は Buddhaghosa の作とは考え難い。特に DhpA は他の如何なるパーリ・アッタカターをも引用せず、JA にもパーリ・アッタカターと確認される引用はなく、その上、この両書にのみは他の書の有する B 名を持っていない点等より判じて、この二書は異系統のアッタカターの様に考えられる。

(6) これに対して、同じく Buddhaghosa の真作性を疑問視されているアッタカターの中でも、DhsA と VibhA の両者は Buddhaghosa の著作との関連性が強い。特に VibhA は Vis と Kañkh を除く彼の凡ての著作に引用されており、かつ VibhA はそれらよりの引用を含んでいないという事実のみから考えれば、VibhA は Vis の次に著わされたという可能性も考えられるのである（Kañkh は Smp より後の作である点は上述(2)の説明の通り）。因みに DhsA 及び VibhA には、Buddhaghosa の著作以外からの引用は見られず、反対にこの両書は、後述する如く彼よりも後代の人と見られる Dhammapāla 作の Pd やその他後代のアッタカターには引用されているのである。

(7) Buddhaghosa の著作には、DhsA, VibhA を除いて他の註釈家達の著作よりの引用は一切含まれず、逆に彼等の著作には Buddhaghosa の著作（特に Vis）よりの引用が見られることから、Buddhaghosa は Dhammapāla 等、他の註釈家達より前の時代に活躍した人物であり、彼等、他の註釈家達は彼の後輩であることが判明する。この点は従来の説と一致する。

(8) 上述の如く Dhammapāla は明らかに Buddhaghosa の後輩であるが、その Dhammapāla とその他の註釈家、即ち Upasena (NdA の著者)、Mahānāma (PṭsA の著者)、Buddhadatta (BvA の著者) 等との時代の前後関係はなお明確でない。何故ならば、Dhammapāla の Pd と、上記の諸家の著作との間にはほとんど相互の引用関係がなく、その意味では両者は互に別系統の文献とも考え得るからである。ただわずかに BvA に VvA よりの引用が一例存するので、BvA を著わした Buddhadatta は Dhammapāla より後代の人と考えられる。

(9) NdA, PṭsA, ApA, BvA, の四書は、相互に引用している例は皆無であるので、この点より

すれば、これら四書の相互の関連性は薄いと言えよう。

(9) Pd の七書の内部の相互引用の例は少いわけであるが、PetA に VvA よりの引用が見られ、その逆の例は存しない点より考えれば、UdA より ItA, VvA, PetA, ThagA, ThīgA, CpA と列挙する Pd の七書は必ずしもこの順序に従って著述されたとは限らないという見方が可能となる。なおこの点は、今後の課題の一つであろう。

その他、これらアッタカターの相互引用の状況を、その他の種々なる文献的事実や記述内容等と比較し、それらを総合的に検討し厳密に分析考察すれば、アッタカター文献の成立事情や相互関係、更には Buddhaghosa 著作の真偽問題等について、なお解明される点が数多く存するものと期待出来るのである。

註

- 1) パーリ・アッタカター文献の種類や範疇については、広狭様々な定義や分類が可能であるが、今ここでは、「三蔵の直接の註釈書に Vis を加えたもの」とする。この点に関して詳しくは、拙稿「アッタカター文献の種類範疇」(『印度学仏教学研究』第25巻第1号、昭和51年12月、83~88頁)参照のこと。
- 2) この経名は現存しない。HOS 版 (p. 107, § 56) ではこれを固有名詞ととらず “pasādanīyasuttanta” (信樂すべき経典) としている。
- 3) M (No. 60) I-400ff. に同名の経典が存するが、ここには引用文と同一の文は見られない。
- 4) 但し、本表はかなりの増補改訂を必要とする。
- 5) 但し、ビルマではこの三書を Khuddakanikāya 所収のものとして、三蔵の中に含めている。
- 6) 水野弘元「Peṭakopadesa について」(『印度学仏教学研究』第7巻第2号、昭和34年3月、p. 68)。
- 7) 一般にこれら三書に関する研究については、水野弘元『パーリ仏教を中心とした仏教の心識論』pp. 24 & 26 註 17, 18, 19; 中村 元・早島鏡正『ミリンダ王の問い』1 & 3 の各巻末の解説等参照。
- 8) これは偈文であるが、Vis においては Porāṇa の言となっている。
- 9) これは2行の偈文であるが、Mil からの引用ではない可能性もある。何故ならば同一の文が Thag v. 1002 (Nālandā 版による。PTS 版では1行目と2行目の間に別の1行が介在し、かつ2行目の前半が欠) にも存するからである。
- 10) その他 DhsA の pp. 194, 279, 294, 311, 314, 349, 396, 426 等に多少なりとも Mil と比較し得る様な文言が存する (DhsA の当該頁の脚註による)。
- 11) cf. UdA 295; Dhpa V-21; PvA 103.
- 12) cf. Bdkkhu Ñāṇamoli, tr.: *The Path of Purification (Visuddhimugga)*, Colombo, 1964 (2nd edn), p. 147; Bhikkhu Ñāṇamoli, tr.: *The Pitaka-Disclosure (Peṭakopadesa)*, London, 1964, p. 400, Appendix Nos. 3 & 4.
- 13) P. V. Bapat: *Vimuttimaggā and Visuddhimaggā*, Poona, 1937, Introd. p. xliii.
- 14) 前掲「Peṭakopadesa について」pp. 66~67.
- 15) 前掲 *The Pitaka-Disclosure*, pp. 399~402, Appendix Nos. 1, 2, 11, 12.
- 16) これについては例えば、前田恵学『原始仏教聖典の成立史研究』1964年, pp. 797~812 参照。
- 17) Dhammasaṅgahaṭṭhakathā とある。
- 18) Mahāvibhaṅgaṭṭhakathā とある。
- 19) ここにはA名しか出ていないが、Smp, MA, AA 等にはA名、B名が共に出ているので、これもパーリ・アッタカターであると判断した。
- 20) Vaṇṇakathā Satipaṭṭhāne vuttanāyena' eva veditabbā. とある。

- 21) Sesa-vatthūni Dīgha-Majjhima-Aṭṭhakathāsu Satipatthāna-sutta-niddese vithāritān'eva. とあり、その脚註には “DA(?); MA i, 233” とある。
- 22) Ayam ettha saṅkhepo, vitthāro pana Dīgha-Majjhim'aṭṭhakathāsu Satipatthāna-vaṇṇanāyaṃ vuttanāyena'eva veditabbo. とあり、その脚註には “MA., DA. *loc. cit.*” とある。
- 23) 註21)と同じ。
- 24) 註22)と同じ。
- 25) A名のみであるが、Smp, MA, AA 等には A名, B名が共に出ているので、ここもパーリ・アッタカターと判断した。しかもここではパーリの MA と列記されている。
- 26) 脚註の一写本には, “Kumārakapahāhe (Khp IV)” とある。逆に KhpA p. 152 では本文に “Kumārakapahāhe” とあるところが, 脚註の一写本では “Visuddhimagge” とある。
- 27) 共に A名のみ。アディカランはこれをシーハラ・アッタカターと見ている (E. W. Adikaram: *Early History of Buddhism in Ceylon*, Colombo, 1953 (First Impression 1946), p. 13, note 3).
- 28) 共に Dhammasaṅgahaṭṭhakathā とある。
- 29) Aṅgulimālasutta-vaṇṇanā とある。この経は M No. 86 (M II-97~105).
- 30) Kandhakaṭṭhakathā とあるのみ。
- 31) Nidāna の末尾である。
- 32) Aṭṭhaka-Aṅguttaraṭṭhakathā とある。Pd 七書の内, B名で表現されている AA は存しない。但し ThagA (II-155) には UdA (A名) と列記されている AA が見られるが, この UdA は ThagA (I-36) に A名, B名で表わされた例が存することからパーリ・アッタカターであると考えられ, そうすればそれと列記されているこの AA もパーリ・アッタカターである可能性が強くなる。そしてもしそうだとすると Pd 中の A名の AA は凡てパーリ・アッタカターということになろう。
- 33) Dhammapadavaṇṇanā とある。
- 34) 註32)参照。
- 35) Sabhiyasutta-vaṇṇanā とある。
- 36) A名のみであるが, 同じ UdA (I-36) が A名と B名で表わしている故, パーリの Pd と判断した。
- 37) ここでは JA は, 明らかにパーリの DhsA (Atthasālinī Dhammasaṅgahaṇṇanā とある) と列挙されているので, この JA はパーリ・アッタカターである可能性が強い。
- 38) NdA には, その他 Vis を始めとして出典無明記の引用が多く見られる。
- 39) Khandhakaṭṭhakathā とあり VibhA (A名) と列記されている。
- 40) Khandhakavaggaṭṭhakathā とある。但し SN の蘊品 (22~34 品) は “Khandhavagga” であって “Khandhakavagga” ではない。
- 41) VibhA (A名) が “Khandhakaṭṭhakathā” と列記されている。註39) 参照。
- 42) DhpA と列記されている。
- 43) Ratanasuttavaṇṇanā とある。KhpA p. 158ff. または SnA p. 278.
- 44) Maṅgalasuttavaṇṇanā とある。KhpA p. 88ff. または SnA p. 300.
- 45) AA と列記されている。註42)参照。
- 46) 共に Dhammasaṅgahaṭṭhakathā とある。
- 47) Vimalatthavilāsini Vimānavathaṭṭhakathā とある。
- 48) 凡て Dhammasaṅgahaṭṭhakathā とある。
- 49) Dhammasaṅgahaṭṭhakathā とある。

(第5節以下は次号掲載の予定)